書評

アレックス・マーロウ『ニュースを解読する』

島田　洋一（福井県立大学教授）

トランプ前大統領に近いメディアの中でも、とりわけ光彩を放ってきたのがブライトバート・ニュース・ネットワーク（Breitbart News Network）である。小組織ながら機動力があるため、進歩派からは目の敵にされてきた。

ブライトバートは、メディア界の風雲児アンドリュー・ブライトバート（1969－2012）が2007年に、電子版に特化した形で立ち上げた。独自の情報源を生かし、進歩派議員のスキャンダルを追及して失脚に追い込むなどで、早々に注目を集めた。ブライトバート自身は不幸にも心臓発作に襲われ、43才の若さで急逝したが、同憂の保守ジャーナリストたちが跡を継ぎ、今も存在感を保っている。

そのブライトバートの編集主幹アレックス・マーロウ（1986年生）が、2021年5月に出したのが本書、『ニュースを解読する―既存エリート・メディアの隠れた取引と秘めた腐敗を白日のもとに晒す』である。[①] 米主流メディアの、滑稽なまでの偏向を生々しく剔抉し、優れた同時代史の証言となっている。

マーロウは、かつてブライトバートで上司だったスティーブン・バノン（1953年生）についても率直に評している。バノンは、2016年の大統領選挙でトランプ陣営の選対本部長、次いでホワイトハウスの首席戦略官を務め、短期間ながら、国際的な「時の人」だった。

「バノンはしばしば生産的で、通常圧倒的な天才と魅力を持つが、全く不正確な話をする時でも断定調で語るきらいがある」とマーロウは言う。その通りだろう。本書にはこうした鋭く光る人物評が、随所に散りばめられている。

歴史認識に関して注目したいのは、「1619プロジェクト」に触れた部分である。すなわち、アフリカから黒人奴隷を載せた最初の船がバージニア植民地に着いた1619年こそが「アメリカの真の建国の時であり、決定的瞬間だった（America's true founding and its defining moment）」とする、米国史見直しキャンペーンである。ニューヨーク・タイムズが、その時から400周年に当たるとする2019年8月に立ち上げた。

プロジェクトの責任者が、黒人女性のニコル・ハナジョーンズ（Nikole Hannah-Jones、1976年生）である。2015年にタイムズ紙の記者となり、人種差別問題が主な担当だった。

2021年、タイムズ紙を去り、「人種とジャーナリズム」担当の教授としてノースカロライナ大学に転ずると伝えられたが、ひと悶着起こった。保守派の批判を受けた同大学理事会が、終身雇用でなく5年任期とし、そのことが左派の学生や職員の反発を買って大いに揉め、紆余曲折を経て最終的に理事会が条件を終身雇用に改めた。しかしハナジョーンズは結局、同大学の話を蹴り、黒人の高等教育機関として由緒あるハワード大学（ワシントンDC）の教授となった。この辺り、人事をめぐる進歩派メディアと大学の関係を象徴的に示している。

さてマーロウは、「1619プロジェクトは、建国者たちは『奴隷制度の継続を確保するた

め』イギリスからの独立を宣言したと主張するが、真実ではない」などと批判した、米国史専門家たちの合同書簡を紹介する。

そして、「従来、進歩派も保守派も、自由の漸進的な拡張がアメリカの歴史だと考えてきた」という、ニコラス・ガイアット英ケンブリッジ大学教授（米国史）の言葉を引き、合衆国は奴隷制度を永続させるための装置だという1619プロジェクトの主張が事実だとすれば、この国の創建は「純粋な悪」(pure evil) 以外のものではなくなると述べる。

しかし、それは事実に合致しない。従って、1619プロジェクトは「この国の歴史を通じて、最大のでっち上げ（the greatest hoax)」と言わざるを得ない、というのがマーロウの整理である。

ところが同プロジェクトは、ピュリツァー賞を受賞するなど、逆に進歩派からは暖かく迎えられた。アメリカにおける知的亀裂の深刻度がここに窺える。

マーロウは昨今の「キャンセル・カルチャー」（否定文化）は、ジョージ・ワシントンなど建国の父たちを、その言動の、現在から見て問題ある部分にとどまらず、全人格的に否定するところに特徴があると言う。英国からの独立戦争は奴隷制維持のためだったとなれば、最高司令官ワシントンは悪党集団の用心棒に過ぎない存在となる。

「私の見るところ、ニコル・ハナジョーンズは、暴力を容認する、犠牲者コンプレックスに侵された人種陰謀理論家であり、露骨な虚偽を筆にし、アメリカを憎む存在でもある」とマーロウは総括する。さらに、「彼女は、悪化する人種ヒステリーの代表者」とも付け加えている。

これはこれで全人格的な否定に近いが、このマーロウとハナジョーンズの、相容れない対立こそ、アメリカで進む「冷内戦」の縮図と言えるだろう。[②]

注

① Alex Marlow, *Breaking the News: Exposing the Establishment Media's Hidden Deals and Secret Corruption*, 2021。

② バイデン政権下の「冷内戦」の状況については、島田洋一『アメリカ解体』（ビジネス社、2021年）参照。